

スウェーデンからの手紙

てんかん治療研究振興財団理事
清水當尚
(大日本製薬副社長)

昨年 11 月下旬、スウェーデン Oothenburg 大学の小児科医 Kyllerman 先生からの手紙に同封されていた一通の手紙は長い年月、薬の研究開発に携ってきた私達への至福の便りであった。

小児てんかんの専門家である Kyllerman 先生は、難治性の小児てんかん治療に力を注がれ、当社が最近開発した新しい抗てんかん薬"E"も研究的に使用されている。スウェーデンでは未だ"E"の市販はなされていないが、既存の抗てんかん剤ではコントロールし得ない患者への投与で少数例ではあるが良い結果が得られ、今後も続けて使用していく旨を知らせる先生からの手紙であった。"E"で治療を続けて劇的な回復をみせた子供の両親からの同封の手紙は次のようなものであった。

「私共はスウェーデン Gothenburg に居住する 18 歳と 15 歳の二人の息子をもつ夫婦です。私達は貴社および貴社の薬である"E"に感謝の気持ちをお伝えしたいと思い、この手紙を書くことにいたしました。

この 1 年は将采何が起ころうと私達の心に残ることでしょう。私達の下の子 M は難治療性のてんかん患者です。生後 5 ヶ月のときから麻酔を必要とする大発作に頻繁に襲われ彼は大変に辛い思いをして来ました。彼の先生は Kyllerman 先生です。M は月に 2～3 回麻酔を必要とするような発作を起こし、その度に入院し治療を受けていました。彼はあらゆる種類の薬を試しましたが、いずれも彼を助けてはくれませんでした。1989 年と 1990 年の二度手術を受けましたが、残念ながら何の効果もありませんでした。1990 年のクリスマスには 3 日間隔で起こる新たなけいれんのために再度病院を訪れました。

1990 年 12 月 28 日、Kyllerman 先生は"E"という新しい薬を試してみようと約束して下さい"E"の投与が開始されました。それから 1991 年 5 月に一度発作を起こしたのみです。しかもそれは感染に関係したものでした。私達は奇跡か起こったと思って"います。M は"E"という小さな白い錠剤のおかげで殆んど発作から解放されています。私達の家族としての生活に温かさが戻って来ました。ついに私達は私達の生活が出来るようになったのです。もう一度"E"に感謝します。私達はこの薬の投与を継続することが出来、また他の子供たちにも M と同じような機会が与えられますことを期待しております。

追伸、この夏、世界陸上選手権大会を観ておりました時に、私達は自国を応援しておつましたが、M は私達のところに来て常に、「日本がベストだ。だってけいれんの薬を作ることが出来るんだもの」と言っておりました。」そして手紙の最後に患者の自筆で I LOVE JAPAN・・M と書かれてあった。

読み終わって私は熱いものが込み上げて来るのを禁じ得なかった。一口にてんかんと言っても一様ではなく多くの種類があり、原因もよくわかっていない。一つの薬ですべてのてんかんに効くとは思われないが、M君の場合は Kyllerman 先生を仲介として"E"とのすばらしい出会いがあったのだ。M君本当に良かったね。これからも"E"が発作を抑制し続けるように…と祈らずにはいられなかった。それと同時に"E"の開発をめぐるいろいろなことが走馬燈のように思い出された。

医薬品の研究開発は極めて科学的であると同時に多くの人が織りなすドラマでもある。ここに登場する"E"もはじめて合成されてから 15 年の開発期間を必要とした。多くの解決すべき問題に日夜立ち向かっていった研究開発の仲間達。慎重に且つ適切に臨床研究を進められた臨床専門家。研究に協力された患者さん。長い間激励し続けてくれた当社の人々。等々の直接、間接舌労を共にした方々の顔が浮かぶ。苦しかったことはすべて忘れ去り、"E"を世に送り出せた幸運に酔った。薬の仕事をやって来て本当に良かったと思うと共に、この感動を持ち続け更なる飛躍をと心に誓った。

この日は奇しくも大阪道修町の薬祖神、神農さんの祭日であった。

(平成 4 年 3 月 16 日、化学工業日報掲載)